

かけ「豊後全史」をしらべて見た。

「豊後全史」は如藤賢成の明治二十五年十二月の著述で、その下巻稲葉氏の項に

「慶応元年四月、津久見徳浦の漁人、イタラ貝を豊漁し、その数凡そ三十六万あった」と明記されている。

徳浦と中浦、場所はかなり隔ってはいるが、中浦湾での豊漁もあるいはこの慶応元年の四月の頃ではあるまいか。そして、異常発生し溢獲し絶滅といったことになつたものであらうか。その辺は謎である。(おわり)

絵はがきに学ぶ

羽柴

弘

(その一) 長島川と佐伯湾

下段に貼付の絵はがきの二景、よくごらん下さい。濃霞山は野阿山の美称であるが、今は樹木が生い茂つてこの市街展望はほとんど叶わないが、叶うたとすれば全く隔世の感がするであります。

右下の隅に海運橋が見えます。しかしその上流向って左岸の広大な埋立てには家が軒をなく、奥へへ引込線路の鉄橋が小さく写っています。鶴谷中宿校敷地の埋立ても、まゝてや佐伯球場も、その近くの橋もありません。(拡大鏡でごらん下さい。いゝいゝおかります)

注目すべきは平野の上の段々島が、実にくっきりと写っています。嘗てと耕していても作つていたころの写真でしょう。

手前の防備隊の跡の廢墟の様子、その右に復興建築の工場か倉庫の姿が対照的で、歴史的に珍らしい写真です。

終戦後の写真にはまちがいない。そのことは左上の「佐伯湾の風光」の方に(元海軍要港)とあるし、いずれも戦時中はこんな写真真は、全く写すことが叶わなかつたものです。

(この種絵はがき五種一四〇〇枚づつ二〇〇〇枚入手、毎号紹介します)

濃霞山より佐伯市街を望む

佐伯湾の風光 (元海軍要港)

佐伯名所

